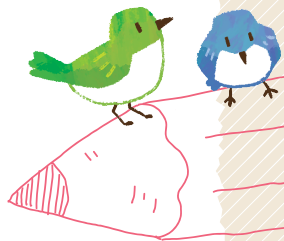




会長賞

中学生の部



「当たり前」

川崎市立塚越中学校
3年 蓬田 竜平さん

僕にとって「障害のある人と触れ合う」ということは、特別な出来事というより、小さい頃から当たり前にあつたことだと思う。というのも、僕は小学校の六年間を支援級で過ごしたからだ。そこでいろんな友達と出会い、一緒に勉強したり遊んだりした経験は、今の僕にとっても大事なものになっている。

自分自身も、小学二年生くらいまでチックの症状があつた。まばたきを何回もしてしまったり、声が勝手に出てしまったりして、うまくコントロールできなかつた。自分でも、「嫌だな」と感じていたし、

僕にとって新鮮で、今も忘れられない。

中学生になると、僕は通常学級に移つた。チックの症状も落ち着き、見た目には特に障害があるようには見えなくなつた。でも、支援級で過ごした経験があるからか、障害のある人への見方は他の同級生と少し違つて感じるがあつた。例えば、クラスの中で特別支援学級の子のことをからかったり、ちよつと距離を置いたりする場面を見たとき、僕はとても嫌な気持ちになつた。支援級と一緒に過ごした友達の顔が浮かんできて、「あの子たちもみんなと同じように頑張つてる仲間なのに」と思ったからだ。だから僕は、その子に普通に話しかけたり、廊下ですれちがつたら自然に挨拶を交わしたりしていた。僕にとっては特別なことではなく、小学校の頃からずっとやってきた「当たり前」のことだつた。

ある時、テレビで障害のある人のことを特集して、「配慮はいるけど遠慮はいらない」という言葉が出てきた。僕はそれに共感した。障害があるからといって特別扱いして壁をつくるのではなく、必要なサポートはしながらも、仲間として普通に接す

電車の中などで症状が出ると、「周りの人は迷惑だと思つていたんだろうな」と考えて余計につらくなつたこともある。でも、支援級にしていると同じように自分のペースで頑張つている友達がいて、先生方も色々な方面から支えてくれていた。だから僕にとって支援級は、「障害があるから特別な人」というより、「いろんな個性をもつた仲間が集まつている場所」という感覚だつた。

支援級には、発達障害の友達や、言葉を話すのがあまり得意ではない友達、こだわりが強い友達などがいた。最初はうまく会話が続かなかつたり、遊んでいてけんかになつたりすることもあつたが、その一方で「自分と違つからこそ面白い」と思つことも多かつた。ある友達は絵がとても上手で、緻密な絵をスラスラと描いていた。集中して描く姿や完成した絵を見て、「自分にはできないな」と思つと同時に、その才能をすごいと思つた。また、言葉で伝えるのが苦手な友達とも、一緒にブロックで遊んだり身振りで伝え合つたりするうちに、言葉がなくても気持ちに通じることがあつた。いつか経験は、

ることが大事だと気づかされた。

振り返ると、僕が支援級で学んだことは、「支援される」という一方的な関係ではなく、「互いに違いを認め合い、一緒に生きること」だつた。人は誰でも得意なことや苦手なことがあり、障害の有無に関係なく違いがある。その違いがあるからこそ助け合えたり、新しい発見があつたりする。

もし僕が最初から通常学級にいたら、こつした気づきはなかつたかもしれない。チックの経験も含めて、支援級で過ごしたことは自分にとって大きな財産だと思つた。これからも障害のある人と出会つたら、その人を特別扱いするのではなく、一人の仲間として接したい。そして支援級で学んだ「違いを認め合う気持ち」を忘れずに、人と人が尊重し合える社会を当たり前にしていきたい。